



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 15 号 令和7年 6月 18日

発行人 会長 仁科 英俊

それぞれの学校の物語を未来へ紡ぐ

東西しらかわ小学校長会長 仁科 英俊
(白河市立白河第一小学校長)

教諭時代に7年間勤務した白一小に、16年ぶりに赴任いたしました。校舎は耐震化されたものの、ほとんど昔と変わりません。食堂は雨が降れば雨漏りがし、廊下側の窓枠には隙間風がヒューヒューと吹き込み、時にはバタバタと音を立てることもあります。しかし、校舎内は整理され、清潔に保たれていました。また、教職員が互いに協力し、子どもことや授業について真剣に話し合う姿も変わらず、安心感を覚えました。

先日、本校の特色の一つである体育会(運動会)が開催されました。見どころは応援合戦です。赤組、白組それぞれが自分たちでチーム名を考え、応援歌や応援の仕方を工夫して披露します。気迫のこもった応援は会場全体を大いに盛り上げました。団体種目は、長年受け継がれてきた伝統種目です。子どもたちは勝利のために作戦を練ったり、先輩から勝ち方を教わったりと、真剣に取り組む姿が見られました。徒競走では、運動が得意な子も苦手な子も、最後まで諦めずに走り抜く姿に感動しました。本校の体育会の素晴らしい点は、子どもたちが当日を見据え、主体的に活動する点にあります。これも以前から変わらず受け継がれてきた伝統です。

それぞれの小学校でも、地域社会の変遷と共に歩み、数多くの卒業生を社会に送り出してきました。校舎の隅々に刻まれた記憶、地域住民の皆さんとの温かい交流、そして代々受け継がれてきた

教育への情熱。運動会などでの子どもたちの歓声、地域の行事への積極的な参加、特色ある教育活動など、各学校には独自の物語と文化が息づいています。これらの歴史と文化は、学校のアイデンティティを形成する根幹であり、子どもたちの心の拠り所となる大切なものです。しかしながら、私たちの社会は、かつてないスピードで変化し続けています。グローバル社会の波は国境を越え、情報技術の革新は人々の生活様式を一変させました。少子高齢化、多文化共生、環境問題、そして予期せぬ感染症の流行など、現代社会は複雑で予測困難な課題に直面しています。

このような状況において、私たちが目を背けることのできないのが、教育の今日的な課題です。子どもたちの学力格差、深刻化するいじめや不登校の問題、多様なニーズに対応するための特別支援教育の充実、長時間労働が常態化している教員の働き方改革、情報化社会を生き抜くための情報リテラシーの育成、そして、子どもたちの心のケアやウェルビーイングの向上など、その課題は多岐にわたります。これらの課題は、単に各小学校での取り組みに留まらず、校長会としての横のつながりを強化し、さらには社会全体で共有し、解決に向けて取り組むべき重要なテーマです。

このような変革の時代においては、時代の流れを的確に捉え、柔軟に変わっていくことが不可欠です。ICTを効果的に活用した個別最適化された学びの実現、主体的・対話的な深い学びの推進、探究的な学習の導入などなど、新しい教育の手法や考え方を積極的に取り入れ、実践していく必要があります。私たち校長も、常に学び続け、自己研鑽に励んでいかなければなりません。

もちろん、変わるべきものがある一方で、決して変わってはならないものも存在します。私たちは、それぞれの学校が持つ歴史と文化という貴重な土壌を深く理解し、その上で、教育の今日的課題に真摯に向き合い、時代の変化に柔軟に対応しながら、未来を担う子どもたちにとって本当に必要な力を育てていかなければなりません。各学校の特色を活かし、先生方の知恵と情熱を結集し、互いに協力し合いながら、新たな教育の未来を創造していく決意を新たにしています。校長会では、今後も課題解決のための情報提供や研修機会の充実を図り、共に手を取り合い、子どもたちの輝かしい未来のために、一層尽力してまいります。

なぜ、登山？そこに山があるからではない理由

破 破 離

東西しらかわ小学校長会副会長 佐藤 康二
(白河市立表郷小学校長)

きっかけは、15年前、教諭として本校に赴任した時、5年担任として企画した「表郷探検」である。校歌に「数多くある文化財」とある通り、表郷地区には、ビャッコイを始め、常在院の絵巻物、三十三観音磨崖仏等、様々な文化財がある。その中に、建鉢山があった。ヤマトタケル伝説の山で、たくさんの遺物が出土している。この山に、子どもたちを連れて登った時、山頂から眺める故郷の田園風景に、みな歓声を上げた。そして、自然豊かな表郷の美しさを知った。当時、4年生の学年行事で、地元の天狗山に登った。これは、地元の方々の計らいで、1/2成人式の一環として行われていた。それから時を経て、4年前、再び本校に赴任した。しかし、成人年齢の変更に伴い、4年生の学年行事も天狗山登山も行われなくなっていた。そこで、2年前から、学校の校外学習として、4年生全員で天狗山に登った。それに合わせて、6年生は関山に登った。どちらも小一時間で登れる山だ。頂上からの眺めは、どちらも格別で、疲れが吹き飛ぶ。まさに、校歌にある「我が故郷の美しさ、みどり関山、社川」の景色だ。それから、5年生も前述の建鉢山登山をしなくなっていたので、こちらは、宿泊学習の際に、那須の茶臼岳登山を行った。校歌には「遙かなる那須連峰よ、あの高さこそ我らが理想」とある。昨年、5年生が全員、一人も欠けることなく、茶臼岳頂上に立った。厳しい登山道も、お互いに声を掛け合い、励まし合った。山頂では、最高の笑顔で、やり切った達成感を味わった。それは、登山は、どんなに苦しくても、結局、自分の足で、一歩ずつ進むしかないからだ。弱音を吐きながらも、あきらめずに頑張ったから、全員で頂上に立てたのだ。その自信やその経験が、今、6年生として学校を支える強い気持ちの根底にある。

故郷を山頂から眺め、その美しさを目に焼き付ける。苦しくても、励まし合い、自分の力を信じ、あきらめないで最後まで頑張る。そうして、得た素晴らしい眺めと自信は、自分への最高のご褒美。これらは、登山ならではの特別な体験がもたらす。これが、本校が登山をする理由である。

東西しらかわ小学校長会副会長 山川 晃司
(西郷村立熊倉小学校長)

茶道や武道の世界に「守(基本の習熟)破(基本の応用)離(独自の境地開拓)」という言葉があります。教諭時代に、赴任1年目の学校で当時の教頭先生からこの言葉を教えていただきました。その学校の伝統や指導方針をよく理解しないまま、勝手な振る舞いをして生意気だった私を諭してくれた言葉であり、その後ずっと大切にしてきた言葉でもあります。

しかし校長職になり、2,3年の短い期間で「守」の部分にそう長く時間をかけては「離」にたどり着かないということに気づき、少し考えが変わりました(「守」を疎かにしているわけではないことをお断りしてタイトルを造語「破破離」にします)。そのような考えの基、本校に赴任してから2年間で様々な学校課題解決のための方策を講じてきました。そして3年目を迎えた今年度の大きな改革は、「通知票年2回発行」と「日課表の改訂」です。それぞれに多様なねらいはありますが、共通しているのは働き方改革の推進です。

通知票年2回発行については、先進的に実施している他市町村や他県の情報を幅広く収集し、実施に向けて職員間で熟議しました。また、教育委員会の指導を仰ぐと共に、学校運営協議会、PTA本部役員会での協議、保護者への周知と段階的に進め、今年度からの実施にたどり着きました。

日課表については、「下校時刻の繰り上げ」と「ゆとりある学校生活」という相反することを実現するために、教務主任を中心に全職員で何度も案を練り直しました。モデルにした小学校の校長先生から直接ご指導もいただきました。結果、今年度の下校時刻は6校時日でも15時05分です。

さて、このように進めてきた今年度の改革ですが、机上の空論にすぎないかもしれません。今年度1年間はこの改革の成果と課題をしっかりと検証し、次年度へつないでいくことが大切な務めであると考えております。私は、今年度末で役職定年を迎えますが、後任者が新たな視点で学校課題解決を一層推進しやすいような環境を整え、表題の「離」とは意味が異なりますが、この学校を離れることができればと思っている昨今です。

つながりの中で

東西しらかわ小学校長会副会長 齋藤 雅彦
(棚倉町立棚倉小学校長)

棚倉小学校は50年前に入学して、6年間学んだ母校です。校長室の本棚には私の学年の卒業アルバムや修学旅行の写真などがあり、懐かしい級友とともに昔の私がいったりします。

この春、棚倉小学校に2度目の入学をして、私はまた勉強をしています。キャリア教育です。紀要を読んだり、研修計画を読み返したりしながらキャリア教育の核を見つけようとしています。そんな毎日の中で研修主任とお話することも多いのですが、こんなことがありました。

今年度の研修計画の検討をした後、研修主任から、以前一緒に勤めた時の研修だよりを1枚だけ今でも持っていると聞きました。その学校では2年間研修主任を務め、75枚の研修だよりを書きました。その一番最後、2011年3月11日付東日本大震災の日に先生方に配付した研修だよりです。今度見せてねと話すと、今持っていますよとすぐに机から出して見せてくれました。

前半は年度末の学力テスト結果と毎日の授業のつながりについて、後半は1年間の研修を総括したものでした。前半の毎日の授業については、1時間の授業を、描いた1枚の竜のうろこに例えて、形のいい鱗もあればかすれた鱗もあるけれど、全体として竜は完成しましたかと問いました。後半の総括では、授業に悩んで自分なりのやり方を見出す姿勢に意味があること、自分の考えが妥当かどうかを教えてくれるのが研究同人であること、求めようとするものは日常の授業の中になれば意味がないことの3点を確認したものでした。

偉そうなことを書いていたものだと恥ずかしい限りですが、棚倉小学校に赴任してキャリア教育を学ばなければと焦っていた気持ちも、少し落ち着きました。授業や行事の積み重ねで子どもを育てること、正解はない中で自分の考えを見つけようとすることに意味があることは、どの学校でも同じこと。そんな気持ちになりました。

東西しらかわ小学校長会のネットワークは、正解がない中で自分の考えを見つけようとしている私の大きな力になっています。私も誰かの力になれたらと思っています。よろしくお願いします。

積極的に自己研鑽を積む、常に一步先行く人に

西郷村立川谷小学校長 早川 貢

学校経営・運営ビジョンのローガンに「多様性と調和を重視した『誰一人取り残さない』教育の推進」を掲げ、日々の教育活動に取り組んでいるところです。重点事項は「小中一貫(連携)を意識した取組の充実」と設定し、川谷小中学校の教育内容や指導の連続性を図りながら、9年間での子どもの学びと育ちをつなぐ一貫的教育の充実を推進しています。また、教職員には「今までやっていることだから」という前例踏襲(慣行)にとらわれず、アイデアを出し合いながら小中で連携できることを検討してほしいと伝え、現在、積極的に連携を図って教育活動を実践しています。

校長として2年目を迎え、順調な学校経営に満足していた4月下旬に、28年前にお世話になった校長先生から次のような文面のはがきをいただきました。「校長2年目、無事スタートされたことと思います。慣れてきたので1年目より気楽です。特別なことがなければ、まあまあ進んでいくでしょう。しかし、校長職はまだ始まったばかりです。積極的に自己研鑽を積むことが大切です。『考えていたよりも楽なものだ』と安心し、のんびりしてはいけません。世の中そんなに甘くないし未来の扉は開かない。扉は自分の力で自分が開くもの。今の比較的時間のとれる時に今後の方向性や課題について一生懸命取り組み、常に一步先行く人でいてほしい。今をどう過ごすかが自分の将来につながる。ファイト早川、頑張れ貢。」

私はこの文面の前半部分を読んで、はっとしました。現状に満足し、自己研鑽を積むことに消極的な自分に気づききっかけとなったからです。同時に「今から次期学習指導要領について勉強し、周りが勉強し始めた時には次の課題に取り組んでいる、常に一步先行く人でいてほしい。」との校長先生の助言を思い出しました。

私の校長職はまだ始まったばかりです。積極的に自己研鑽を積む、常に一步先行く人になるために、まずは次期学習指導要領の勉強から始め、校長としての資質の向上や、学校経営の充実を図りたいと思います。また、東西しらかわ小学校長会の皆様からご指導いただき、学校経営に努めてまいりますので、よろしくお願いします。

矢吹小学校のこと

みんなが笑顔の「ニコニコハクニ」を目指して

矢吹町立矢吹小学校長 舟木 裕子

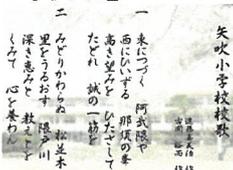
白河市立白河第二小学校長 深谷 裕之

『やっぴー』



これは、「やっぴー♪」というギャル(死語?)のあいさつではなく、我が校の愛されキャラクターの名前です。第43代古市正雄校長先生が在職中に、当時の児童会が中心となり、作られたキャラクターだそうです。やっぴーは、矢吹小学校が「Happy♪」になるようにとの願いをこめて名付けられました。また、愛されキャラクターの「やっぴー」は、桜花を中心に矢羽根を配した現在の校章をもとに、「命の矢」「思いやりの矢」「がんばりの矢」「学びの矢」「花と緑の矢」の5つの矢を背負っています。毎年、入学式の際に6年生が新1年生に紹介します。

『校歌』



校歌の作詞は遠藤喜美治さん、作曲は古関裕而さんです。かの有名な古関裕而さんを教えた先生が矢吹小学校にいらして、その先生が、古関裕而さんに作曲を依頼したとか。矢吹小学校の校歌は歴史を感じさせる勇壮な校歌です。

『公孫樹』



私は恥ずかしながら読めませんでしたが、「イチョウ」と読むのだそうです。校庭には、大きなイチョウの木がそびえたっています。「公孫樹」は、第38代藤田克彦校長先生が名付けた学校だよりの名称です。代々受け継がれ、今年度は914号からのスタートとなりました。「イチョウは、年数が経った老木でないと銀杏が実らない。教育というのは、長い年月を要する計画・実践であり、すぐに結果がでるものではない。だからこそ、継続的な努力を積み重ねていくものである」と、イチョウと教育とを重ねて名付けたそうです。

矢吹小学校は、今年度で創立152年目を迎えます。代々受け継がれてきた教育の営みを大切にしながら、イチョウの木に思いを馳せ、一人ひとりの子ども達の夢が、将来、銀杏のように必ずや結実するように、教育活動に精進して参ります。

4月7日の朝、南側の門近くの交差点で子どもたちを待っていました。私のあいさつに、「おはようございます!」と元気にあいさつを返してくれた後、「今の人だれ?」「校長先生じゃない?」とささやきながら学校へ入っていく子どもたちを見送りながら、着任式に臨みました。

着任式では体育館に2年生以上が集い、とても元気なあいさつで着任者を迎え入れてくれました。それを聞いて、17年ぶりにまた白二小で勤めることができることへの感謝の気持ちと、校長としての責任の重さを感じました。そして始業式の時、白二小の良き伝統である、「元気なあいさつ」をこれからもみんなで大切にしていくこと、そしてみんなが笑顔でいられる、「ニコニコハクニ」を目指して、周りの人へ思いやりの心で接すること、わがままやうそをつかないこと、集団生活を行う上で、一人一人が相手のことを考えてちょとずつ我慢することが大切だと話しました。

あれから1か月が経ち、朝の街頭指導に立つと「おはようございます」だけでなく、「校長先生、おはようございます!」と言ってくれる子もいます。そして嬉しいことに、あいさつに笑顔を添えてくれる子もたくさんいるのです。

私は、そんな朝の様子を見て、子どもたちが登校してくることはあたりまえのことだと捉えずに、「今日も元気に登校してくれてありがとう。」という気持ちを込めて、朝のあいさつを交わすようにしています。また、先生方にも教室で子どもたちを迎える際には、「今日も学校に来てくれてありがとう」という思いでいてほしいと伝えました。そして、学校に来れば、明日も楽しいことが待っていると子どもたちには感じてほしいのです。

4月1日の朝、私を「お帰りなさい」と迎え入れてくれた白二小の教職員のホスピタリティに感動しました。そんなやさしさあふれる教職員と力を合わせ、子どもたち、保護者、地域の皆様にとってかけがえのない「ニコニコハクニ」になるよう、微力ではありますが、精一杯がんばりたいと思います。これからも、ご指導よろしくお願いたします。

白四のよさを守り、磨く

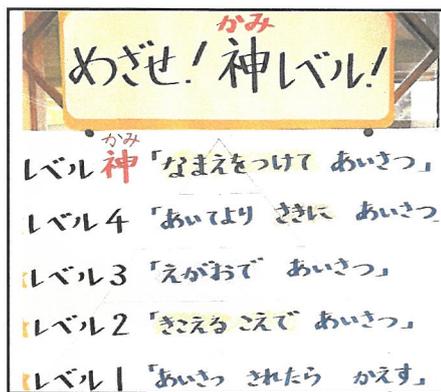
地域とともに

白河市立白河第四小学校長 中野 久美子

須賀川市にて新任校長3年間を勤め、12年ぶりになる白河市での勤務に緊張していた4月、子どもたちと教職員から「校長先生、おはようございます。」と、爽やかな挨拶をいただきました。

「おはようございます」のあいさつに自分の名前をつけられる。なんと嬉しく温かな気持ちにさせられることでしょうか。このすばらしい習慣は白四小ならではのよさだと感じました。

調べてみると、本校には次のような掲示がありました。



これに照らし合わせてみると、本校には神レベルの児童が数多くいるようです。そしてそれは教職員がトリプルA(あいさつ・あきらめない・あとかた

づけ)の指導を徹底し、後ろ姿で育ててきたものであることも分かりました。この取組はすでに1年生にもしっかりと伝わっており、「校長先生、おはようございます。ぼくは〇〇〇〇です。」と言ってくれる子どももいるほどです。

このような白四小の風土や児童の姿は一朝一夕につくられたものではありません。長年にわたって根気強く学校経営の理念を伝えてこられた校長とその指導のもと一丸となって取組んできた教職員、そして賛同し協力してきた保護者が築き上げ、それを素直に受け止めた子どもたちの努力が形となって表れているものです。

私が白四小の校長としてまず大事にしなければならないのは、こうした白四小のよさを守り続け、そのよさに磨きをかけることです。名前をつけてのあいさつプラス一言「半袖半ズボンで元気ですね。」「この間のけがは大丈夫ですか。」など、笑顔で付け加えるようにしています。

校長として、自校のよさを守っていく責任の重さを自覚しつつ、さらに発展させながら継承していけるよう、私らしく取組んでまいります。

白河市立小田川小学校長 石塚 隆広

本校は明治22年から数え、創立136年を迎えました。少子化の波には抗えず、昭和の中頃には400名を超えていた児童数が今年49名となりました。

しかしながら、根田醤油、安珍堂、根田安珍歌念仏踊りなど、小田川の地の利を活かした豊かな学びは途切れること無く続いています。また、7月の親子のつどい(キャンプファイヤー)、2月のひな祭り餅つき会など、長く続けてきた地域との行事も残っています。そこには、保護者・地域の力強いバックアップがあり、それが長く続けてきた小田川小の良さであると実感しています。

5月の学区内交通安全パレードは、学区内4カ所をバスで移動しながら交通安全を呼びかけます。楽器はPTA役員等が軽トラック4~5台で運搬します。沿道では、子どもたちの演奏にたくさんの方が拍手を送ってくださり、高齢者施設ではお年寄りの方が目を潤ませながら子どもたちの演奏を聴いてくれます。子どもたちが、地域に見守られ必要とされていることを実感し、達成感を味わう大切な機会となっています。地域にとっても、なくてはならない行事です。

実家庭数は38となり、PTA活動は今後見直しが必要となるのではないかと危惧していますが、PTAの協力体制は素晴らしく、奉仕作業や廃品回収、プール清掃等にも積極的に参加してくれます。

地域の協力も心強く、常に学校の様子を気にかけ応援してくれています。行事への協力はもちろん、地域協力者による清掃活動ボランティアが月1回行われ、職員・子どもだけでは手が回らないところを支援してくれます。5月には、16名のボランティアがトイレの清掃を行ってくれました。花壇等の除草が追いつかない状態を見ると、休日返上で作業を申し出てくださった方もいます。小田川には、子どものために協力を惜しまない風土があります。

本校は、まさに「地域とともにある学校」です。地域の支えで学校運営ができていると実感しています。地域とともにある校長でなければならないというプレッシャーと日々戦っています。

「三つのちかい」

弘法山の麓より

白河市立五箇小学校長 角田 真弓

五箇小学校は、今年で150周年を迎えました。この記念すべき年に、五箇小学校長を拝命し、勤務させて頂けることに心から感謝しております。

五箇小学校は明治8年に田島小学校として開校し、当時は238名の児童がこの学び舎で過ごしていたそうです。現在、児童数は53名となり、およそ5分の1程度になってしまいましたが、「地域とともにある学校」という姿は今も変わりません。

五箇小学校には、「三つのちかい」という、楽しい学校を作るための合言葉があります。

- 一 みんなで仲良く勉強します。
- 二 力をあわせて頑張ります。
- 三 自分も人も大事にします。

これが、五箇小学校、五箇地区で目指す子ども達の姿として教育目標となり、学校・地域・家庭で共有し、五箇の宝を「みんなで」育てています。

学校教育に地域の方々積極的に参加し、教育活動の充実のために惜しみなく力を貸して下さるのは五箇地区、五箇小の強みであると実感しています。そしてその地域性が、素直で勤勉な五箇小の子ども達の気質を作り上げているのだと感じました。

先日、運動会が行われました。運動会の名称は、「五箇地区・五箇幼稚園・五箇小学校合同運動会」です。文字通り、自治会長様、消防団などなど、地域の方々や保護者の皆様と知恵と力を出し合い、運動会を実施します。

当日の朝は、早くから地域の方が各方部のテントを校庭の指定された場所に張っていきます。それが終わると、自然に手の足りないところに人が集まり、あっという間に運動会会場が出来上がってしまいます。こうして、学校に地域の方々や保護者の皆様が集い、活動を共にすることで、「三つのちかい」に謳われている目指す姿を、後ろ姿で見せてくれているのだと感じた場面でした。

今年は、150周年記念の運動会となり、参加して下さった皆さんでバルーンリリースを行いました。歴代の校長先生、地域の皆様、保護者の皆様と共に築き上げてきた歴史と伝統を守り、「三つのちかい」にある児童像の実現ができるようにと願いを込めて風船を空に放ちました。

埴町立笹原小学校長 佐藤 克浩

東白川への勤務は初めてとなります。毎日かの有名な泥棒坂を越え、50分かけての通勤。そして「朗らか」という言葉がぴったりの33名の子ども達プラス3名(笹原幼稚園長兼務)計36名の子ども達と毎日楽しく過ごしております。優しいばかりと思っていたら和太鼓を叩かせるとたいへん勇ましく、1~4年生が弘法太鼓、5・6年生が川上太鼓という地域芸能を継承しております。ありがたいことに笹原地区の賢人方が保存会をつくり、総力を挙げてバックアップしてくださっているのです。(音楽祭の折にご披露できると思います)

「笹原地区の名物は何?」と尋ねれば「ささはらパン」と答える方が少なくない伺っております。お店に伺うと、すでに売り切れという場合が多く、未だそのうまさを体験できていないことが悔やまれます。このささはらパンからそう離れていないところに「賢瑞院」という曹洞宗のお寺があるのですが、実はこのお寺が明治6年、笹原小学校創立の地と伺いました。もちろん、そのころの建物がそのまま残っているわけではないでしょうが、いにしえからの歴史の重さとそこはかとした親しみが感じられる場所です。

さて、弘法太鼓の名称は学校の近くにそびえる弘法山に由来しているものと考えます。この秋、全校生で登山する予定であります。日本全国に弘法大師伝説が残っていますが、ひょっとしてこの埴の地にもあるのかと思い調べてみることにしました。しかしながらそういった伝承は見つからず、残念がっていると本校の関係者が「うちに弘法大師いますよ。」と言うのです。

実はこの方、学校の近隣にある東浄寺というお寺にお住まいで、江戸時代に作られた「弘法大師坐像」が安置されているとのこと。何と見つけました、弘法大師。ただ正直な話、真言宗のお寺に弘法大師像があるのは当たり前なことなので、もちろん新説発見というわけではありません。ただ、東浄寺がふもとにあるので弘法山と名付けた可能性は高いのではないかと考えています。

この目にも美しい山間の地にどっぷりつかって日々過ごせることを大変ありがたく思います。ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。